

指導者（保護者）として大切にしたいこと（その40） ～「平等な指導の難しさ」～

2022年8月吉日
U12部会広島地区
SV 大庭 浩資

広島県バスケットボール協会U12部会広島地区の保護者の皆様、指導者の皆様、役員の皆様、いつもお世話になっております。

また先日の『第46回 全関西ミニバスケットボール交歓大会』では、大変お世話になりました。

このコロナ禍の中、広島県U12部会長を対策責任者とし、日々の検温やこまめな手洗いとうがい、マスクの着用や手消毒の徹底を図るなどなど、最大限の感染症対策を行いつつ大会となりました。

参加したチームはもちろんのこと、TOの手伝いをお願いしたチームの皆さん、また役員、審判、指導者の皆様、そして感染予防にご尽力いただきました多くの保護者の皆様のおかげで、無事大会を終えることができました。心よりお礼申し上げます。

さて今回のテーマは「平等な指導の難しさ」としました。

ミニバスケットボールの指導者の方々といろいろな話をする際、よく話題に挙がることの中に「(選手や保護者が求める) 平等な指導の難しさ」があります。

例えば、「練習や試合中のプレイに対して、同じ内容の事を言っても、A選手は納得するがB選手は泣き出してしまふ」、また「同じような失敗に対して、コーチはC選手に対しては叱るがD選手に対しては優しいと周りの選手や保護者が言う」などの話はよく聞きます。

実際、私も同じような経験を何度かしています。昨年度は、私が発した言葉でチームの選手の心に深い傷を負わせてしまい、今でも本当に申し訳なく思っています。

いかなる理由があろうとも、指導者として失格です。

コーチ自身はいろいろ考えての言葉かけですが、その意図を選手や保護者にきちんと伝えるのは本当に難しいとつくづく思います。

でも「平等な指導」って、本当にできるのでしょうか？

今回は小学校でたまに見かける一場面をもとに、「平等な指導の難しさ」についての私見を述べたいと思います。

文意が難しく、まさに前述した『意図することが伝わりにくい』かもしれませんが、ご容赦ください。

まず、たまに見かける場面とは・・・。

『ひいき』という事象から考えてみます。

子どもたちと先生の関係で、子どもがとても嫌うのは、先生が『ひいき』するということです。

ある時、子どもが担任を校長先生に直訴した話です。

5年生の男子3人が校長室に来ました。

「先生は、男子には本気で怒って、女子には優しいです。生活ノートの赤ペンで女子はOKが多くて男子は少ない。ノートを出してない人は黒板に×を書く。出している人は○が付く。花丸が欲しいわけじゃないけど、いやな感じが残る。この前、ぼくは、給食時間に班のみんなをにらめっこして笑わせた。みんなとても喜

んだ。でも先生は何も言わなかった。ぼくが頑張っている時はちゃんと見てなくて、他の時は『やり直し』と言う。他の子よりもぼくたちには怒り方が激しくてひどい。校長先生、クラスに言いに来て。えこひいきせずに、みんな平等にしてほしいです。ひいきされている人にも、ぼくたちの痛みが分かるようにしてほしいです。」

担任の先生からすれば、何とかみんなをできるようにさせるための指導です。もちろん先生自身は、できる子をひいきするなど思いもよらないことです。あくまでも理性で指導している、そう強く思っています。

子どもは、自分が良くないことをした、ノートを出さなかったと自分の非を認めることを言う、それは理性です。それに対して、ひいきというのは感情です。自分に対して先生の怒り方がひどいと感じるのは感情です。理性では分かっているけど感情では許せないのです。

ここで大切なのは、理性と感情とは分けて考える必要があるということです。理性に対しては理性で応じると納得できるものです（と、思うのですが？・・・悩み）。

もう一つ「平等」と「公平」について考えておきたいと思います。

子どもは「みんな平等にしてほしい」と訴えました。考えてみると「平等」にするには大変難しいです。不可能といえるでしょう。

担任の先生は差別せず誰にも平等にしているつもりです。しかし、対応には先生の性分、人間性が表れます。同様に、子どもは子どもの性格や個性で受け止めますから、ある子は「先生はとても厳しい」と言うでしょうし、ある子は「別に厳しくもなんともない」と言うでしょう。受け止め方、感じ方はそれぞれ異なるのです。そのような違いに等しく対応するというのは、できるはずはないのです。

そんな中でも多くの先生は、児童のいろいろの違いのある性格や個性をきちんと見ていこうとしているのです。

これらのことを考えた時に、ミニバスケットボールにおいても、指導を「平等」にするのではなく、適切には「公平」にということではないでしょうか。

子どもの能力を伸ばすには、個に応じた指導をしていく必要があります。個に応じるというのは個人差に応じるものです。それで、Aさんには強く厳しく、Bさんには優しく穏やかにとそれぞれの個に対して、言葉かけや指導の仕方がおのずと違ってきます。しかし子どもからすれば、それが不平等に見えて、容認できないのです。

それから考えると、個に応じるというのは、当の本人も、チームの選手みんなも、納得し共有できて可能になるでしょう。それが、個の違いを認め、個に応じた対応を受け止めるという、公平につながると思います。

さらに言えば、指導する場面において、「一人一人が大切な選手だよ」と指導者の言葉と態度で示すしかないと思います。

しかし、『言うは易く行うは難し』です。

目の前に試合がある限り、「チームが勝つためには、そんな悠長なことは言ってもらえない」というのが指導者の本音でしょうね（・・・笑い）。

指導者の皆様、今後も効果的であった指導場面、逆に失敗した指導場面などを共有し、指導者同士切磋琢磨しながら、互いに指導力を高めていきましょう。